

アメリカで始めたレストラン事業が昨年50周年に。 日本での生活基盤のない私も「ゆうゆうの里」にいれば憂なく毎日を過ごせます

京都（ゆうゆうの里） 中藤百々代様（81歳） 令和4年6月 一人入居

商社マンの夫はユーモアがあり、おもしろい人でした

私は台湾で生まれ、父はフィリピンで戦死したので、あまり記憶に残っていません。終戦になり母は私達5人姉妹を連れて日本に引き揚げました。当時4歳だった私は母の心労を感じ取り、少しでも支えたいと思ったものです。夫とは夫の姪と私の姪が同級生という縁で、互いの姉たちが仲を取り持つてくれ、知り合いました。夫は満州生まれで、ユーモアがあり、おもしろい人でした。仕事は商社に

勤めており、新しいマーケットを探すことに長けていました。仕事熱心で帰宅はいつも深夜。それでも子どもたちにはとても慕われていました。

夫のアメリカ駐在を機に 始めた鉄板焼きレストラン

1972年に夫がアメリカのノースキャロライナに駐在することになりました。渡米して一年後私は、夫の母、妹と共同で、アトランタで鉄板焼きのレストランを始めました。まだ日本食のお店がない時代です。しかし、その一号店はお客さんが入らなかったのでシャロットというところに出店しました。そこはとても流行ってくれたので、やっと息がつきました。その後、マートルビーチとミズーリにも店を出し、地元では日本食で名の知れたお店になりました。しかし、レストランの共同経営が始まってからというものの、大変な苦勞があり、何かにすがりたいとの気持ちからクリスチャンになりました。息子たちは小さい頃から手伝ってくれました。息子たちの友達も頻繁に泊まりに来て手伝ってくれました。息子の友達は

今でも家族のような存在です。長男は東京に就職しましたが、今は他の息子達がお店を継いでくれています。

日本食の好きな夫や私には、 アメリカの施設暮らしには 不安がありました

2014年に夫が大腸癌を患い大阪で手術を受けました。その結果ストーマをつけることになったのです。夫一人ではうまく処置できず、私が介助して毎日ストーマを交換しました。必死の介護の甲斐があつて、ストーマは外せることになりました。傷口は見る間に塞がり、見事に治癒しました。しかし、この介護体験があつて、老後を真剣に考えるようになりました。アメリカでは、頼りになる子供たちの住居も遠く離れており車でしか移動できません。また、保健・医療は高額の割にサポートが手薄で、同居家族の負担が大きいと感じました。アメリカの老人施設を見学した時には、日本食の好きな夫や私がアメリカの施設で暮らすことに大きな不安を感じました。結局、老後は日本を選択し帰国することにしました。残念なこ

とに、夫は4年前に亡くなり一緒にの入居はかないませんでした。

できれば年に一度は息子や 孫に会いに行きたい

一人になってから、私が選んだ施設は、京都（ゆうゆうの里）でした。自然環境が豊かで、入居者の雰囲気明るく賑やかだったことが決め手です。まだ、入居間もないですが、入居者と仲良くなり人と人の心地よい関わりが広がる楽しみがあります。宇治駅の近くの教会も紹介していただきました。馴染めそうなので通いたいと思っています。アスレチックジムではトレーナーのアドバイスを受けてやる気になりました。息子や孫が訪ねてきた時に、皆と一緒に行動したいですから、運動を心がけようと思っています。ここにいたら、日本での生活基盤のない私でも、憂なく毎日を送れます。昨年でレストラン開業50周年を迎えアメリカで家族全員が集まりパーティをしました。これからも元気に年に一度は息子や孫に会いにアメリカに行きたいです。



ご主人とお孫さんと一緒に。オレゴン州のクレーターレーク公園で

